

全調によるコード学習の実践と考察 II

—保育者養成校における鍵盤楽器授業「音楽基礎」「保育ピアノ」を通して—

永田実穂

Analysis and Consideration of the Practice of Learning All Key Chords II —Through the Keyboard Instrument Classes “Music Basics” and “Nursery Piano” at a Training School for Nursery School Teachers

NAGATA Miho

はじめに

日本の人口が減少していくなかで、将来を担っていく子ども達をより良い環境で育てていくことが重要課題となり、様々なかたちで少子化対策や子育て支援策が実施されている。このことは、保育士など子どもに関わる職種にとっても、処遇改善などをもたらす可能性がある一方、現場では、保育環境の更なる充実やレベルアップを求められていくことが考えられる。また、現状においても、多数の行事や事務作業などで恒常的に時間を取られ、就職後にスキルアップする機会も少ないことを考慮すれば、限られた学生の期間内に、保育者として必要な技能を身に付けておく必要がある。さらに、保育者を志す学生でも音楽に対する経験値の個人差が大きくなっており、画一的な授業形式では十分な養成を果たせないという課題を生じている。こうしたことから、学生個々のレベルに合わせつつも、全ての学生が保育現場で必要な水準まで技能を効率的に習得し、同時に応用力・適応力を高めるための手法として、鍵盤楽器を学修するうえでは全調コード学習が効果的であるとの考えのもと授業に取り組んでいる。

本稿は、山口芸術短期大学保育学科での鍵盤楽器授業「音楽基礎」で行った全調コード学習の取り組みと効果について、また、ピアノ学習「保育ピアノⅠ～Ⅳ」でそれをどのように活用されたかについて、2年生の12月にアンケート調査を実施し、検証と考察を加えたものである。

1. 研究目的と背景

本研究は、2021年度に授業内容を見直した「音楽基礎」を通して、2年間のピアノ科目「保育ピアノ」において、全調コード学習がどのような効果があったのかをアンケートを通して検証し、考察するものである。あわせて、2022年8月に開催した夏期講座（山口学芸大学、山口芸術短期大学 教育・保育支援センター主催）では現役の保育者や小学校教諭を対象にした「コードで伴奏付けⅠ」「コードで伴奏付けⅡ」を行い、そのアンケート結果からコード学習についての有効性を考察する。

「音楽基礎」は1年生前期に開講する授業で、鍵盤楽器を学習するために必要な音楽理論や読譜力、伴奏付けなどの習得を目的とする。

授業内容を見直した背景として、入学生のうち鍵盤楽器経験が無い者や経験値が低い者の割合が以前より増加したことや、開講期間が通年から半期に短縮されたことで、その対策として、よ

り効率的な鍵盤基礎学習を図る必要に迫られたことがある¹⁾。

全調コード学習は、初心者にとってはハードルが高いと思われるが、アメリカの「バステイン」や「ペースメソッド」のピアノ教育法では幼児期から導入しており、らせん学習することで、初心者からでも身に付けることができるとされるため、採り入れる価値があると判断した。

2021年度以前の「音楽基礎」においてもコード学習を行っていたが、コードの学習期間が短かったことや長期間の和音記号（I度、IV度、V度のカデンツ）の学習、メジャーコード、マイナーコードを同時に学習することで受講者に混乱が生じ、コード学習がなかなか定着しなかった経緯があるため、こうした反省点を踏まえて全調コードの導入に当たった。

また、最近の子どもの歌曲の楽譜のほとんどにコードネームが記してあり、初心者には譜読みや伴奏が難しいものもコードネームからベース音による伴奏を導き出すことが可能であることから、コード学習を多く取り入れることに意義があると考えた。

この研究は、2022年度生の2年次、12月時点でどのくらい鍵盤学習に活用され効果があったかをアンケート調査により把握し、検証した。

2. 全調コード学習について

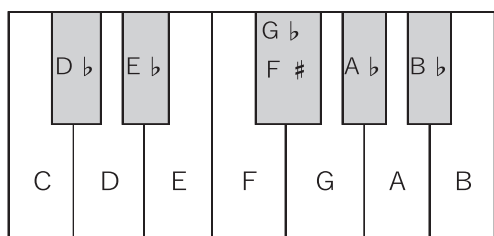
全調コードは、鍵盤楽器の白鍵、黒鍵からなる12（異名同音を入れると13）の音名を根音として成り立つ和音（コード）のことである。（図1）

そこから様々な種類のコードが派生するが、最も基本であるメジャーコードの基本形を中心に学習し、ある程度理解できたところでマイナーコードを学習する。なお、メジャーコードの真ん中の音を半音下げるとマイナーコードになる。つまり、メジャーコードをしっかりと身に付けるとマイナーコードにも応用できる。

基本のメジャーコードは以下の表になる。（図2）

12（異名同を含むと13）のコードを五線で記すと（図3）のようになる。

(図1)



(図2)

#系コード	G	D	A	E	B	F#	C
♭系コード	G♭	D♭	A♭	E♭	B♭	F	

(図3)

① 白鍵のみで構成されたメジャーコード



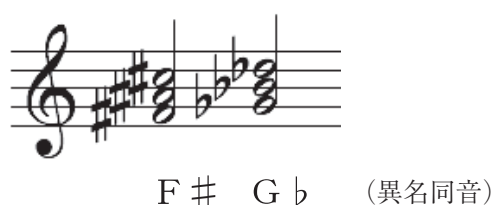
② 真ん中が黒鍵のメジャーコード



③ 下と上が黒鍵で真ん中が白鍵のメジャーコード



④ 全て黒鍵で構成されたメジャーコード



⑤ 鍵盤の一番下が黒鍵のメジャーコード



⑥ 鍵盤の一番下のみ白鍵のメジャーコード



このように、12の根音から構成されるメジャーコードが鍵盤の色別に6パターン分類できる。

これまでのコード学習では、ハ長調、ヘ長調、ト長調上にあるコードを中心にし、黒鍵を根音とするコードの学習はほとんど行われてこなかった。その理由として、黒鍵を根音とした和音を使用した子どもの歌曲が少ないことなどがあげられる。しかし、昨今の子どもの歌や学生が弾いてみたいと思う曲には、様々な調の和音を使用されていることから、12調のコードを学習することで、難しいと感じられる和音に対する抵抗感が減り、理解しやすいのではないかと考えた。

アメリカのピアノ教育メソッドである「ペースメソッド」はコード学習をする場合、白鍵のみのコード、真ん中が黒鍵のコードなど鍵盤を色別にして6パターンのカテゴリーに分類したものを覚える。子どもたちは鍵盤の色と根音の音名を結びつけながら鍵盤に手に乗せながらメジャーコードの感覚をつけていく。

授業ではこの方法を中心に12(13)のメジャーコードを覚え、自分なりに理解しやすい方法で全調コードに取り組んだ。メジャーコードの基本形をしっかり学ぶことでベース音での伴奏付けやマイナーのコードへも応用でき、特に鍵盤楽器の経験値が低く、読譜の苦手な学生にとって有効であると考え実施した。

3. 「音楽基礎」の学習内容

「音楽基礎」は、1年生の前期に開講し、鍵盤楽器経験値などから2つのグレードに分け、10人程度のグループにより授業を行っている。

15回ある授業の前半では主に読譜の理解につながる音名や拍子や調号の読み方、リズムに関することなど鍵盤楽器を弾く際に基礎的な音楽理論を学ぶ。また、階名(ドレミファソラシド)とコードネームをリンクさせた上で、コード学習へ進む。後半では全調(12)のメジャーコードを

鍵盤で弾いたり、5線上に書いたりしながら触覚、聴覚、視覚などから身につけるようにする。

また、アルファベットを書いたフラッシュカード（メジャー、マイナーコード）を見て素早く弾くという項目を追加し、瞬間的にメジャーコード、マイナーコードを理解し、感覚的に鍵盤の上に手を置く練習を取り入れた。期末試験では、コードネームとメロディが書かれた幼児歌曲（事前に課題曲として何曲か示すが、試験当日何か所かコードの変更がある）を見て弾く。授業では半期で20曲以上の幼児歌曲に取り組んだ。

小テストや期末試験の結果は、グレードにより曲の難易度に違いがあるが、コードネームからメロディとベース音で伴奏を弾く課題は両グレードで高得点であった。

音楽基礎の授業時（開講時）には概ね全体的にコード学習の理解をしていたと考えられる。一方、コードの理解が少し困難であるという学生も一定数存在していた。

4. 「保育ピアノ」の学習内容

「保育ピアノ」はI、II、III、IVと1年生前期から2年生後期に渡って開講される。学生の多くが保育職への就職を希望するため、保育現場で活用できるようにそのほとんどが、2年間ピアノ学習を行っている。

学習内容は、各自の音楽経験やレベルに合わせたグレード別になっており、ピアノ曲や、幼児歌曲の弾き歌い、歌唱を個人レッスンの形式で行う。しかし、レッスン時間は90分を4～5人で行うため、1回の授業では1人15分から20分程度となり、半期では週1回×15回で換算すると4時間程度である。

1年次のカリキュラムである「保育ピアノI・II」ではピアノ演奏の基礎や表現力を養うことを中心とし、実習に合わせて弾き歌いなどのレパートリーを徐々に増やしていく。

2年次の「保育ピアノIII・IV」では実習も増えることから、保育現場で活用できるように幼児歌曲の弾き歌いのレパートリーを増やし、楽譜通りだけではなく、コードによる簡易伴奏も取り入れた学習内容になっている。

「保育ピアノI」から「保育ピアノIV」まで経験値や、それぞれに適したレベルによりABCDの4つのグレードに分かれ、それぞれの課題曲に取り組む。鍵盤楽器の経験値が高く、譜読みや弾くことに対して抵抗がない学生はAグレード、ある程度譜読みや弾くことが可能な学生はBグレード、経験値があまり高くはないが初心者ではない学生はCグレード、まったくの初心者や弾くことに自信がない学生はDグレードなど、担当教員らと相談をしながら、各グレードを選択する。

「保育ピアノI」(1年生前期)

主にピアノ曲を中心に授業を行う。A、Bグレードを選択した学生は『ピアノ名曲でこどもと遊ぼう』(本廣明美・加藤照恵共編ドレミ出版2010)、C、Dグレードは『基礎から学べるピアノ1,2,3』(本廣明美・加藤照恵共編ドレミ出版2008)を教則本として用い、全グレードで「歩く」「走る」「とぶ」「ゆれる」をテーマにしたそれぞれの課題曲を練習する。CDグレードは基礎的なテクニックの練習に重きを置き、バイエルなどの曲も行う。並行して、季節の幼児歌曲（春、夏の曲）を8曲練習する。その際には伴奏を簡易にして弾いてもよい。

なお、弾き歌いの教則本は『こどもと楽しく弾き歌い 幼稚園・保育園のうた/ピアノ伴奏曲集』(本廣明美・加藤照恵共編ドレミ出版2010)を使用している。

「保育ピアノII」(1年生後期)

「保育ピアノII」では引き続きピアノ曲を中心にレッスンが進められ、並行して季節の弾き歌い曲を行う。Aグレードは「もりのくまさん」「ばすごっこ」「ゆき」、Bグレードは「うんどうかい」

「手をたたきましょう」「ゆき」、CD グレードは共通で「大きなくりの木の下で」「あくしゅでこんにちは」「ゆきのこぼろず」は、音楽基礎で行ったコードなどを使用した簡易の伴奏付けをするように指定している。

「保育ピアノⅢ」(2年生前期)

幼稚園実習や夏の保育実習に向けて、弾き歌いの曲が中心になる。半期で10曲を学習するが、その中から中間試験と期末試験で2曲ずつ選択する。ほかに就職試験に備え、ピアノ曲を1曲行う。

「保育ピアノⅣ」(2年生後期)

弾き歌い10曲を行う。グレードや曲の難易度によっては簡易伴奏に変えて弾いてもよい。現在、課題曲としている弾き歌いの練習曲は昔から歌い継がれたものが多く、最近保育現場で取り扱うものが少ない。ピアノの自由曲課題は担当教員と相談しながら、学生自身がやってみたい曲を選択し練習する。

5. アンケート調査の方法

音楽基礎、保育ピアノを履修した保育学科2年生(2022年度生)にアンケート調査を行い、その結果を分析し考察した。アンケートは2年生時の12月に行い、入学時から鍵盤学習を始めた学生でも約1年半経過している。

アンケート内容は、主に全調コード学習についてであるが、今後の鍵盤楽器学習の見直しや課題も見出すため、コード学習以外の項目も入れた。

また、アンケートは項目の内容だけでなく、鍵盤楽器の経験値から学習効果を比較した分析を行いたいと考え記名式にし、経験値別にパーセンテージを出して考察した。

以下がアンケート内容である。

【アンケート内容】

- ①コードネームによるベース音は理解できたか？
- ②コードネーム楽譜においてメロディとベース音で弾くことができるか？
- ③12調のメジャーコードを弾くことができるか？
- ④保育ピアノの簡易弾き歌い伴奏で担当教員からコードを使用した指導があったか
- ⑤マイナーコードについて理解できたか？
- ⑦1年時のコードネームの学びから伴奏付けに活かされているか？
- ⑧授業において積極的にコードベース音などで簡易伴奏を行ったか？
- ⑨1年時のアンケートでリズムが苦手という人が多かったが、その後リズムについて理解できるようになったか？
- ⑩鍵盤奏法においてできるようになったことや、苦手なことに関する自由記述
- ⑪簡易伴奏を身につけると伴奏が楽になったか？

なお、鍵盤楽器の経験値は以下のように階層区分し、その傾向などを分析した。

- ・経験値 [低] は鍵盤楽器経験が3年未満
- ・経験値 [中] は鍵盤楽器経験が3年以上～5年未満
- ・経験値 [高] は鍵盤楽器経験が5年以上

6. アンケート調査の結果と鍵盤経験値による分析

アンケートは2022年度生70名のうち67名から回答を得た。回答率は95.7%である。

鍵盤経験値別に分類し、結果は表の通りである。

①コードネームによるベース音は理解できたか？

表 1

	総計	経験値 [低]	経験値 [中]	経験値 [高]
1 理解できた	60.6%	40.0%	70.0%	69.2%
2 大体理解できた	30.3%	45.0%	25.0%	23.1%
3 とっさには出ないが階名を書けば理解できる	9.1%	15.0%	5.0%	7.7%
4 あまり理解できていない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

表 1 では、いずれの階層でも【大体】を含めると多数が理解していると見られるが、[低]では自信を持って【理解できた】とする回答割合が半数未満と低く、経験値の影響があると考えられる。ただ、【理解できていない】とした回答が皆無であり、階名を書くことで補完できているため、経験や練習により理解度が上がり習熟できることが期待できる。

②コードネーム楽譜においてメロディとベース音で弾くことができるか？

表 2

	総計	経験値 [低]	経験値 [中]	経験値 [高]
1 弾くことができる	32.8%	19.0%	35.0%	42.4%
2 少し練習すれば	64.2%	76.2%	65.0%	53.8%
3 弾くことが困難	3.0%	4.8%	0.0%	3.8%
4 メロディ譜を弾くことが困難	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

表 2 より、経験値の低い学生では【弾くことができる】が 19.0%、【少し練習すれば】が 76.2% で合わせると 95% 以上になり概ね弾くことができる。経験値が中程度の学生は【弾くことができる】が 35.0%、【少し練習すれば】が 65% と合わせると 100% となり、回答した全員が弾くことができるという結果がでた。[高]では【弾くことができる】42.4%、【少し練習すれば】53.8% を合わせると 96.2% となり、少数ではあるが、【弾くことが困難】と感じる学生がいる。

【弾くことができる】は経験値との比例相関があり、【少し練習】によって経験値のギャップを補うことができている。ただ、少数ではあるが、経験値 [高]でも【困難】とする回答があることは、原因の検証が必要である。

③ 12 調のメジャーコードを弾くことができるか？

表 3

	総計	経験値 [低]	経験値 [中]	経験値 [高]
1 すべて弾くことができる	9.0%	4.8%	10.0%	11.6%
2 少し練習したらできる	43.3%	19.0%	55.0%	53.8%
3 簡単なものはすぐ弾くことができる	43.3%	71.4%	35.0%	26.9%
4 ほとんど弾くことができない	4.5%	4.8%	0.0%	7.7%

表 3 より [低]では【すべてを弾くことができる】が約 5%、【少し練習したら弾ける】19% と合わせても約 25% である。【簡単なもの】とは、白鍵だけで弾けるものではないかと思われるが、黒鍵が混ざると弾くことに抵抗があるようである。

[中]では【すべてを弾くことができる】が 10%、【少し練習したら弾ける】が 55% と、経験値 [低]よりも全調コードの理解度が高い。[高]は【すべてを弾くことができる】の割合が 1 番高

いが、一方で【ほとんど弾くことができない】と感じる学生がいることも重要なポイントである。

この結果から【簡単なもの】は経験値 [低] でも7割強が弾けると回答している一方で、【すべて】は経験値 [中] 及び [高] でも1割程度と難易度が高く、【少し練習】しても6割強である。また、【ほとんどできない】回答が経験値 [高] で比較的高率であることは、コードに対する適応が困難な学生が一定数存在することを推測させる。

④保育ピアノの簡易弾き歌い伴奏で担当教員からコードを使用した指導があったか？ 表4

	総計	経験値 [低]	経験値 [中]	経験値 [高]
1 あった	59.7%	76.2%	65.0%	42.3%
2 少しあった	19.4%	9.5%	30.0%	19.2%
3 ほとんどない	20.9%	14.3%	5.0%	38.5%

表4の結果から [低] では【あった】と回答した割合が76.2%と3つの経験値の中で最も高い。[中] では【あった】【少しあった】と回答した割合が95%とかなり高い結果が出ている。

一方 [高] では【あった】【少しあった】が約6割で、【ほとんどなかった】が約4割もある。経験値 [低]「中」では【あった】【少しあった】という回答が4分の3以上を占めるが、[高] では半数にも満たない。このことは経験が浅く技術が未熟な学生ほど、コードによる演奏が実践の近道であると教員が意識している結果と思われるが、一方で経験者にとってはコードに慣れ親しむ機会が少なく、苦手意識を生んでいる可能性も考えられる。

⑤マイナーコードについて理解できたか？ 表5

	総計	経験値 [低]	経験値 [中]	経験値 [高]
1 理解できた	22.4%	9.5%	30.0%	26.9%
2 ある程度理解できた	52.2%	71.4%	40.0%	46.2%
3 理解できているが手が鍵盤に乗らない	14.9%	14.3%	25.0%	7.7%
4 よくわからない	10.4%	4.8%	5.0%	19.2%

表5の [低] では【理解できた】【ある程度理解できた】を合わせると約80%となり、理解度が高い傾向がみられる。[中] は【理解できた】【ある程度理解できた】は70%以上となり、ある程度仕組みはできているが、実践となると困難なようである。[高] は【理解できた】【ある程度理解できた】が70%以上あるが、一方で【よくわからない】が約20%と最も高い。

保育ピアノではマイナーコードを扱う場面が少ないこともあり、総じて理解度は高くなく実践も難しい印象が強いと見られる。また、基本のメジャーコードをきちんと理解できているかどうかでマイナーコードの理解度もかわってくる。

⑥メジャー・マイナーのコードネームから両手伴奏を導くことができるか？ 表6

	総計	経験値 [低]	経験値 [中]	経験値 [高]
1 大体できる	22.4%	14.3%	25.0%	26.9%
2 ある程度できる	52.2%	61.9%	55.0%	42.3%
3 ほとんどできない	25.4%	23.8%	20.0%	30.8%

[低] では【大体できる】【ある程度できる】が76%以上となっている。比較的難易度が高い項

目なのだが、思った以上に高い数値が出ている。[中]：【大体できる】【ある程度できる】が80%となり、概ねコードから両手伴奏へ導きだされているようである。

[高]は【大体できる】【ある程度できる】69%となり、ほとんどできないが約31%となり、できない割合が最も高い。両手伴奏にするということは、左手はコードがからベース音を弾き右手はコードの和音を弾くことなので、難易度が高いのであるが、【大体できる】【ある程度できる】が総計で74%となり、思ったよりも高い結果となった。一方【ほとんどできない】という回答が2割から3割あり、苦手意識をもった学生も一定数いる。それにも増して経験値が高い学生が苦手と感じるところが気になる。

⑦ 1年時のコードネームの学びから伴奏付けに活かされているか？

表 7

	総計	経験値 [低]	経験値 [中]	経験値 [高]
1 活かされている	54.5%	71.4%	50.0%	44.0%
2 ある程度活用されている	30.3%	23.8%	40.0%	28.0%
3 あまり活用されていない	15.2%	4.8%	10.0%	28.0%

表7から[低]では【活かされている】【ある程度活かされている】を合わせると95%以上になり、コードネームの学びの内容が伴奏付けなどに役立っていると考えられる。

[中]は【活かされている】【ある程度活かされている】を合わせると、90%になり、経験値が低い学生同様、理解しながら実践していると考えられる。

[高]は【活かされている】【ある程度活かされている】を合算すると72%となり、概ね活かされていると思われるが、【あまり活用されていない】も3割弱ある。【ある程度】を含め【活かされている】と回答した割合は、経験値が低いほど高いという結果であり、コードに対する依存度が経験値と反比例の相関があると考えられる。

⑧ 授業において積極的にコードベース音などで簡易伴奏を行ったか？

表 8

	総計	経験値 [低]	経験値 [中]	経験値 [高]
1 行った	50.7%	71.4%	50.0%	34.6%
2 あまり行っていない	29.9%	19.0%	45.0%	26.9%
3 行っていない	19.4%	9.6%	5.0%	38.5%

[低]では【行った】が70%以上となる。経験値の低い学生は、弾き易いベース音を使用して伴奏付けを行ったのではと予測していたが、【あまり行っていない】【行っていない】も3割程度おり、それまでのアンケート結果からコード（和音）でも出来るようになったのではないかと考えられる。【あまり行っていない】【行っていない】を合算すると約30%である。

[中]では【行った】が50%、【あまり行っていない】【行っていない】も50%となり、この結果から経験値の低い学生同様に、一番弾きやすいベース音の形ではなく、ステップアップしたコード（和音）で行ったり、楽譜通り弾いたりすることができるようになったからではないかと推測する。[高]は【行った】が約35%、【あまり行っていない】【行っていない】約65%となる。

[高]はもともと楽譜通りに弾いたりすることが可能なので、敢えてベース音で弾く必要がないため、このような結果になったのではないかと考える。この項目においても⑦同様の結果が見られ、経験値[高]ではむしろ、コードを避ける傾向にあると思われる。

⑨ 1年時のアンケートでリズムが苦手という人が多かったが、その後リズムについて理解できるようになったか？ 表9

	総計	経験値 [低]	経験値 [中]	経験値 [高]
1 理解できるようになった	36.4%	15.0%	40.0%	50.0%
2 ある程度理解できるようになった	47.0%	55.0%	45.0%	42.3%
3 やはり苦手であり理解できていない (初見が苦手)	16.7%	30.0%	15.0%	7.7%

この項目はコード学習とは直接関係ないが、以前鍵盤楽器を学習する上で苦手であるものとしてリズム譜の理解が多く挙げられた。読譜するには必要なことではあるので、アンケート項目に入れている。表9から考察すると [低] では3割がリズムに関する初見が苦手と感じている。

[中] は【理解できるようになった】【ある程度理解できるようになった】を合わせると、85%になり、リズムに関する理解度が上がっている。[高] は【理解できるようになった】【ある程度理解できるようになった】が9割以上で、リズムに関する理解度が高い。しかし、約8%近い学生は経験値が高くても苦手であると感じている。ある程度理解が進んでいるとは見られるが、依然としてリズムが苦手、とする記述が散見された。特に経験値が低い学生に多いようである。

⑩ 鍵盤奏法においてできるようになったことや、苦手なことに関する自由記述

【経験値が低い】

- ・弾くことができるようになって、時間が経ち、弾かなくなると忘れて弾けなくなってしまう。(複数回答)
- ・コードが分かったので楽譜どおりに弾けない場合コードの方で弾くことができた。
- ・m (マイナー) や d (ディミニッシュ) の記号がつくと少し混乱してしまうことがある。
- ・伴奏が難しい時に自分で簡易伴奏にして弾くことが出来るようになった
- ・少し難しい楽譜でも、ちょっと練習すると歌いながらでも弾くことが出来るようになった。
- ・最初の頃より一度見ただけで弾ける曲が増えた。リズムが苦手なので弾いた時のリズムやタイミングを間違えることが多い。
- ・歌いながら弾くと声がかき消されるので弾き歌いが苦手。楽譜の曲選がもっと日常使いが可能なものや、最近の歌を入れてほしい。(「にじ」など)
- ・丁寧に譜読みができるようになった。練習をきちんとし曲が弾けるようになった。ほめてもらえることが増えた。階名をあまり書かずに読むことができるようになった。右手と左手のリズムが違くと習得するのに少し時間がかかる。
- ・アレンジを加えるより、ミスせず弾ける簡易伴奏を教えてほしい。

【経験値が中程度】

- ・コードで伴奏ができるようになった。
- ・コードを理解してすぐ弾けるようになった。
- ・簡易伴奏のレパートリーが増えた。一定の速さを保って弾くことが苦手である。
- ・マイナーコードはよくわからない。楽譜に全部ドレミを書かなくても練習できるようになった。

【経験値が高い】

- ・楽譜を見て左手伴奏をつけることができるようになった。
- ・楽譜どおりに弾くことが多いので、コードはほとんど使わないし覚えていない。授業で教わった時は理解できたので、少し練習すればできると思う。
- ・コードネームをみながら簡易伴奏が出来るようになった。右手でメロディを弾かずに、両手で

伴奏する曲は弾き歌いが難しく苦手である。

- ・弾きながら歌えない、しっかり声が出ない、使う歌がない。(普段から使えそうな曲がレパートリーにあまりない)
- ・音や指使いなど自分が弾き易いように考えることが出来るようになった。
- ・新しい曲を弾くことが苦手、また新しい曲を練習すると、前にできていた曲が弾けなくなる。

⑪簡易伴奏を身につけると伴奏が楽になったか？

表 10

	総計	経験値 [低]	経験値 [中]	経験値 [高]
1 簡単になった	52.4%	55.0%	66.6%	40.0%
2 ある程度簡単になった	27.0%	35.0%	27.8%	20.0%
3 よくわからない	15.9%	10.0%	0.0%	32.0%
4 簡単になっていない	1.6%	0.0%	0.0%	4.0%
5 簡易伴奏のつけ方がわからない	3.2%	0.0%	5.6%	4.0%

表 10 の考察から [低] では【簡単になった】【ある程度簡単になった】を合わせると 90% なる。【簡単になっていない】や【簡易伴奏のつけ方がわからない】という回答は 0% である。[中] は【簡単になった】【ある程度簡単になった】を合わせると 94% 以上になった。一方少数ではあるが、伴奏のつけ方がわからないという回答もある。[高] は【簡単になった】【ある程度簡単になった】が約 6 割となっている。【よくわからない】が約 3 割、【簡単になってない】【簡易伴奏のつけ方がわからない】も合わせると 8% の回答があることから、経験値の高い学生にとっては簡易伴奏の必要性あまり感じていないことからくる回答であろうと考える。

【ある程度】を含め【簡単になった】という回答が約 8 割あるが、これにも経験値との反比例関係が見られる。

7. アンケート調査結果による考察

アンケート調査の結果と鍵盤経験値による分析から大きく 2 つの点が明らかになった。

①全調コード学習をおこなう意義や効果は、概ね認められる。特に鍵盤経験値が低い、あるいは中程度の学生にとってはコードから伴奏を簡易化して弾き易くするなど、自分なりに伴奏の方法を見出してコード学習を応用しており、有効であったことが窺える。

②一方で、経験値が高い学生にとっては、コード学習があまり有効的に活用されていないことが明らかになった。その理由として、伴奏を簡易化する必要がないことから、あえてコードを使うことが面倒だと思わないのではないかと考えられる。さらに、積極的に活用する機会がないので、コードの仕組みや 1 年生で行ったことを忘れ、考えながら弾くことが煩わしいと考えるのではないかと推測する。

また、今回は鍵盤楽器の経験値での分析であったが、経験値の高低だけでなく、学生の理解力や、理解してコード学習に臨もうとする真摯な姿勢、また練習量にもコード学習効果が影響しているのではないかと考えられる。したがって、経験値が高い学生が意欲をもって取り組めるような学習プログラムの工夫や改善が必要であることがわかった。

自由記述では、普遍的な幼児歌曲だけでなく、最近の子どもの曲についても学習したかったなどの意見があり、ポップス要素が強い最近の曲には和音の種類も複雑になり従来のカデンツ（I 度、IV 度、V 度進行）の伴奏では対応しきれないものもあることから、コードによる伴奏が適している。また、「練習して弾くことができるようになった曲が、しばらく弾かないと忘れてたり、弾けなくなったりする」という回答が、経験値が低い学生だけでなく高い学生にも複数みられた。

これは、手や耳で覚えて弾く（楽譜を見ないで弾く）時に起こりやすく、譜読みが苦手であることなど読譜力に問題があることがわかる。

8. 夏期講座受講生のアンケートによる考察

2022年8月に本学で行われた夏期講座（山口学芸大学、山口芸術短期大学 教育・保育支援センター主催）では保育者や小学校教諭を対象とした「コードで伴奏付けⅠ」「コードで伴奏付けⅡ」を行った。講座内容について、Ⅰは基礎初級編、Ⅱは基礎中級編でそれぞれ90分ずつの実践を伴うもので、受講者はコード学習をしたことがある人や、ほとんどしたことがない人など様々であった。

講座後のアンケートには、以下のようなものがあった。

- ・改めてコードを基礎から学ぶことで今までよりピアノが好きになり、簡単な曲から挑戦してみようと思った。
- ・大学で習ったコードについて復習しながら学ぶことができて良かった。
- ・とても楽しく基本的なところから学ぶことができた。
- ・コードについて勉強することがなかったので、とても分かりやすかった。
- ・コードについて説明を聞きながらピアノに触れて確認できたので分かりやすかった。
- ・コードに対して苦手意識があったが、ベース音のみでも曲が成立する、弾けることがわかり自信になった。
- ・コードを使った曲やコードの一番下だけなど、様々なアレンジの仕方を知り、練習を積み重ねていきたいと思った。
- ・基本をもう一度おさらい出来て良かった。
- ・音楽の授業や、朝の会で歌をうたう際、CDではなく伴奏を弾きたいとずっと思っていたのでとても勉強になった。コードの仕組みが分かったので練習したい。

これらの回答から、コード学習は仕組みを理解し、練習を重ねると現場で使えるツールであるということも多くを受講生が実感したようである。

鍵盤経験値の高い学生の多くが、コード学習に依存しなくてもピアノを弾くことに苦勞をしていない。しかし、コード学習は弾くことだけにとどまらず、仕組みを理解し応用できるようになると、メロディとコードのみで書かれた楽譜から合奏譜を作成したり、伴奏を考えたりすることが可能である。保育現場では練習時間を費やさずにピアノ伴奏をしなければならないこともあり、夏期講座のアンケート内容と照らし合わせても、この学習方法は現場ではニーズがあり、コード学習の利用価値は高いと考えられる。

9. 今後の課題

今回の研究結果から、全調コード学習は、本来の目的である鍵盤楽器経験のない者や、経験値が低い者にも、短期間でより効率的に鍵盤基礎学習や伴奏付けを行うことが可能であると立証された。しかし、上級レベルや経験値の高い者にとって現方法ではコード学習があまり活用されておらず、「保育ピアノ」でのさらなる活用や「音楽基礎」の内容改善の必要性など、多くの課題が見つかった。

内田²⁾はコード学習において、「コード奏法は初学者や上級者の学生に効果を表している。」「今後コード奏法を積極的に取り入れていくべきである。」と述べているが、一方で多様なコード学習に発展させることの難しさについても課題としている。ここでいう多様なコード学習とはスリー

コード（ここでいえば白鍵のみでできている和音等）以外のコードを指すが、より発展的なコード学習を展開させるためのコード奏法の導入時期については課題であるとしている。

現在、山口芸術短期大学では、時間割やカリキュラムの関係で、「音楽基礎」の授業は1年生前期の半期間で実施しており、「経験値が高く、ある程度初見や弾くことができる」グループと「鍵盤経験値が低く、初心者が多い」を分け、2グレード制で授業を行っている。しかし、理解度や経験値などから2つのグレードでは「経験値が中程度」に属する学生への補いが難しく、不都合が生じてきている。

そこで4グレードと今よりもグレードを細分化し、レベルや経験値にあわせて細かいプログラムを作成し実施することで理解度が高まり改善されていくのではと考え、現在施行に向けて準備中である。

また開講期間も以前のように通年にするのが可能であれば、保育ピアノと内容をリンクさせながら丁寧に進めることができ、経験値の高い学生らにとってより効果的なコード学習ができると考え、こちらも検討している。

全調コード学習においては両グレードとも、メジャーコードの基本形をしっかり身に付けたいため、コードの転回形の学習は行っていない。これは半期では時間的に難しいことや、基本形をしっかり身に付けていない状態で転回形を用いると混乱が生じ、全調コード学習の定着が困難になるからである。しかし、ある程度基礎力がある中級、上級者以上の学生には、よいタイミングで発展的なコード学習を取り入れると両手伴奏やより工夫された伴奏を自ら考え出すことができ、コード学習の効果を実感できるのではないかと推測する。

全調コード学習は、頭で仕組みを理解すると同時に鍵盤に手をのせて、その感触を繰り返し練習し、らせん学習（時間をかけて何度も行う）することで身に付けることができる。しかし、現在、コード学習において2年間での十分ならせん学習が行えていない。

学習プログラムの改善やグレードの細分化、学習期間の延長、また保育ピアノでの活用法を練り直し2年間で繰り返し使っていくことですべてのグレードでコード学習が有効であると感じられるのではないかと考える。

楽譜通りに弾くだけでなく、学生自らが工夫した伴奏付けを行ったり、難しいものは簡素化したりすることは応用力にもつながり、それはピアノを弾く力にとどまらず保育現場でも必要な力であろう。また、読譜ができ、伴奏がつけられることだけでなく、音楽的に、また表現豊かに保育者が奏でることは子どもの表現力において影響があり、同時に学修することが望ましい。

今後、授業改善を行いどのような効果があったか、またこの学習を行ったことで保育現場に活かされているかについては、次の研究で明らかにしていきたい。

〈注釈及び参考文献〉

- 1) 永田実穂 (2022)「全調によるコード学習の実践と考察～保育者養成における授業「音楽基礎」を通して～」山口芸術短期大学研究紀要第54巻 pp.23～pp.31
- 2) 内田恵美子 (2019)「保育者養成校における音楽能力の育成についての一考察 — コード奏法の学びと効果 —」東海学院大学短期大学部紀要 45、pp.1～7